

## 人間の種類における相互作用性

東京大学大学院総合文化研究科 杉本光衣

### はじめに

科学哲学者のイアン・ハッキング (Ian Hacking) が提唱する相互作用的な「人間の種類 (a kind of people)」は、人間の種概念に関する哲学理論の一種である。人間の種類とは人々の種概念であり、多くは相互作用性をもつ種類として考えられる。初期のハッキングが人間の種類を自然種との対比として提唱したこともあり、人間の種類は自然種の一部であるか否かが主たる論点となってきた。これまでの議論は人間の種類と自然種の線引きについて重要な論点を提供している一方で、人間の種類の理論的中核であるループ効果や相互作用性がどのような性質をもっているのかについては明らかにしてこなかった。

本稿では相互作用性に注目することで、相互作用的な種 (interactive kind) のより正確な理解を目指す。まずは、人間の種類についての一般的な議論を振り返り、ループ効果や相互作用性を線引き基準として人間の種類を自然種から区別しようとする試みが失敗していることを述べる。その上で、相互作用性を種概念の性質の一つとみなし、相互作用性が中心的な役割をはたす相互作用的な種の理解を試みる。自然種か否かという議論から離れ、一つの種においてループ効果や相互作用が起こりやすい部分があるという主張や、社会的制度と結びついた相互作用的な種という主張の理解を試みる。

### 1. 人間の種類に関する議論

人間の種類は、ハッキングによって「人々を作り上げる (Making up People)」プロジェクト内で提唱された種概念であり (1986, 1995a, 1995b, 1998, 1999, 2006, 2007a)、ハッキングの研究の核の一つである (Rodríguez, 2021)。プロジェクトの初期には、ハッキングは自然種 (natural kind) の対比として「人間種 (human kind)」という語を採用していたが (e.g. Hacking, 1986)、プロジェクトの途中から「人間の種類」や「相互作用的な種」という語を採用するようになっていく (e.g. Hacking, 1999)。自然種という哲学的道具立ては多義的で無関係な問題の集まりになってしまっているため適切でなく (Hacking, 2007b)、自然種という語の対比である人間種という語も不適格であると考えられるようになったためである。本稿では、文脈に応じて人間の種類と相互作用的な種を使い分ける。人間の種類は、人間に関する種概念に注目する際に使用する。なかでも、分類的や相互作用的という特徴をもつ

人間の種類が議論の対象となる。相互作用的な種は相互作用をもつ種概念に注目する際に使用する。相互作用的な種という語は、人間以外の種でも相互作用を持つものには当てはまるかもしれないが、本稿では、議論の簡略化のため、主には人間についての種概念を想定する。

「人々を作り上げる」プロジェクトを貫く主な関心は、「人々の分類と、それらが分類された人々にどのように影響を与えるのか、そして次に人々への影響が分類をどのように変えるのか」(Hacking, 2007a, p. 285)ということにある。プロジェクトに関して、ハッキング自身がこれまでの約 30 年にわたる研究を振り返り二つのスローガンをあげている (Hacking, 2007a)。スローガンの一つ目は、「人々を作り上げる」であり、科学が人間を分類することで新しい人間の種類が作り上げられることを意味している。特定の社会的状況において、科学的研究などの対象となるグループに対して、そのグループを分類し表現する観念や分類（以降は「分類概念」と表記）が生起し、新しい人間の種類が作り上げられる。それぞれの人間の種類は人々の経験のあり方に影響を与える。二つ目は、「ループ効果 (looping effect)」であり、対象となるグループに紐づけられる分類概念と、分類概念に当てはまるとして分類された人々のあいだに相互作用が働くことで、分類概念や分類された人々は異なるあり方へと変容してしまう。本稿では、分類概念と分類された対象がお互いに影響し合う現象をループ効果、ループ効果を引き起こす互いへのフィードバック作用を相互作用として記述する (1)。なお、ループ効果は「ラベル」とは区別される。ラベリングはラベルを貼る人から貼られる人への一方向的な作用であり、ループ効果は分類された人が知識へと作用し返すという相互性を有している。

人間の種類とはこのような構造のなかに位置し、(主に科学的な営みによって分類され) 作り上げられた人々の種概念であり、多くは相互作用性をもつ種類として考えられる。ハッキングは自閉症・女性難民・子どものテレビ視聴者などの多種多様な概念を人間の種類として挙げている。人間の種類は特定の社会のなかで提唱され、提唱されることによって人々の行動や経験が変容し、さらに人々からのフィードバックを受けて種概念は変化していくのである。

ハッキングは人間の種類に関するループ効果に付随して、いくつかの重要な論点を明らかにする。第一に、人間の種類は人間の経験の仕方に影響を与えている。私たちが経験する方法は、私たちが何者であるかに負っており、つまりはどのような人間の種類であるのかに影響されているのである。

第二に、人間の種類は「相互作用的な種」である。すでに確認してきた通り、分類概念が特定の人間を分類すると、分類された人は分類されたことを自覚することで自らの行動を変容させ、科学的概念に作用しかえす。このようなフィードバック効果をもつものが相互作用的な種である。これに対置されるのは「無反応な種 (indifferent kind)」である。相互作用的な種は分類にされたことによって変化するが、無反応な種は分類されたことに反応し分類概念と相互作用することはない。無反応な種の例としては、クォークやプルトニウムなどが挙げられる (Hacking, 1999)。

第三に、以上のような性質から、人間の種類は自然種とは区別される。人間の種類に該当する人々は分類されたことを自覚することで自らの振る舞いを変化させるため、分類されることによって対象となる人々は以前の人とは違ったあり方へと変容していく (moving target)。自覚によって対象が変化することは自然種には起こりえず、人間の種類に特有であることを初期のハッキングは主張した。ここから、自然科学と人間科学 (特に社会科学) の研究における方法論的差異を対象の違いによって説明できると期待された (2)。

人間の種類に関する批判の多くは第三の点に集中している。批判者の多くは、ループ効果が起こることによって人間の種類を自然種と区別することはできないと考えている。ループ効果は典型的な自然種においても起こるからである。

ボーゲン (1988) は、ハッキングが指摘するようなフィードバック・メカニズムは社会的概念に特有なわけではないと指摘する。マリファナを違法薬物に指定することによって、私たちの意識が変わり、マリファナの生育環境などが変わることになる。「これらの変化は植物に影響を与え、それらの影響への注意は私たちの考えを変化させる」 (Bogen, 1988, p. 66) のである。ボーゲンは対象と観念のフィードバック・メカニズムに注目することで、対象の自覚がなくても相互作用が起こることを主張したといえるだろう。さらに、ボーゲンによれば、このようなフィードバックが起こる場合にも自然種としての性質は保持される。社会学の知識も同じであって、相互作用が起こることによって自然科学と人間科学の違いを説明するためには、ハッキングは更なる説明をする必要がある。

また、Ershefsky (2004) は、生物種と人間種の違いはこれまでに思われてきたよりも小さいと述べる。ハッキングの議論は生物種と人間種を区別する議論であるが、生物学的性質と社会的性質を成立させる原因は複雑に絡み合っており簡単には切り離せないことや、人間以外の種においても社会性が

認められていることなどから、この区別はうまくいかない。社会的性質のいくつかは生物学的な性質がなければ成立せず、生物学的性質のいくつかは社会的な性質がなければ成立しない。Ershefskyによれば、ハッキングの議論は社会種と非社会種の区別と、生物種と人間種の区別を混同しており、この二つはピッタリ重ならないのである。

以上の批判点をまとめると、①ループ効果が発生することのみを線引き基準として、人間の種類を自然種から区別することは難しいことや、②特定の種における生物学的性質と社会的性質を単純に線引きすることもできないことがわかる(3)。

他方で、これらの批判点はループ効果自体を否定するものではなく、ループ効果を種概念の性質の一つとして採用することは可能である。そのためには、ループ効果や相互作用性がどのようなものであるのかが明瞭である必要があるだろう。ハッキングはループ効果や相互作用性が起こるための統一的なモデルや理論を提示しなかったが、これらは全く無秩序に起こるものとは考えられない。種概念の理解を深めるために、先行研究を参照しながら相互作用性がどのようなものであるのかについて考えていきたい。

## 2. 相互作用性

相互作用性や相互作用的な種について理解するために、明らかにしておくべき点が二つ存在している。第一に、相互作用が起こりうる範囲は決められるのか。人間の種類のみには相互作用があるという初期のハッキングの主張が誤りであることはすでに述べてきたとおりである。それでは、どのような基準を用いて相互作用性の範囲を考えられるだろうか。また、これらはどのような条件下でならば起こり得るのだろうか。第二に、相互作用はどのようなメカニズムを有しているのだろうか。ハッキングは知識に関する社会現象を発見したが、動的唯名論に基づいた歴史的な分析と記述を主とし、相互作用性についての具体的な理論を提供しなかった。以上の2点を明らかにすることで、種概念における相互作用性についてよりよい記述が可能となるだろう。

### 2.1 相互作用性の適用範囲

「相互作用」は自然科学・社会科学などの広い分野で使用されてきた概念である。ここまででも確認してきた通り、ハッキングが提示した相互作用性は、主には分類された人と分類概念のループ効果を可能にする作用として提唱された。

相互作用が起こりうる範囲をどのように考えるべきだろうか。まずは、ハ

ッキングや批判者たちの論点に従って、相互作用が起こる種と起こらない種の二つに分類することが可能であるのかを検討する。仮に、A. 相互作用性の有無と、B. 人間に関する種か否かの組み合わせによって、4種類の種概念を分類してみよう。このとき、人間の相互作用的な種 (human interactive kind)、人間の非相互作用的な種 (human indifferent kind)、人間以外の相互作用的な種 (non-human interactive kind)、人間以外の非相互作用的な種 (non-human indifferent kind) の4つの種類が想定される。この分類を使用してこれまでの議論を簡略化して整理すると、ハッキングは人間の相互作用的な種と人間以外の非相互作用的な種はループ効果や相互作用によって区別されると主張している。一方、ハッキングの批判者らは、この2つの種が同一の種概念であると主張することになる。

この4つの種がそれぞれ異なる種であるという主張が説得的であるためには、A. 相互作用性の有無と、B. 人間に関する種か否かが、はっきりと区別できなくてはならない。しかし、先にも確認したように、このように相互作用があるか否かで種を分類することは成功していない。まず、A. 相互作用性の有無について、ハッキングの批判者らは、種ごとの線引きを提供することは難しいと主張している。また、B. 人間に関する種かどうかについては、何を人間に関する種概念と定義するかについて合意が得られていない。したがって、相互作用的な種と非相互作用的な種の違いを説明するためには、相互作用が起こる種と起こらない種への分類を試みるアプローチではなく、異なるアプローチが必要とされている。

その一つが、相互作用が起こる種と起こらない種があるのではなく、一つの種において相互作用しやすい部分としづらい部分を認めるアプローチである。このアプローチを検討することで、一つの種のなかで相互作用する範囲を定めることは可能だろうか。

ハッキング自身は、何が相互作用するのかについてのはっきりとした答えを与えていない。ただし、社会的に構成されたといわれる事柄について、対象・観念・エレベーター語を区別する必要性を述べており (Hacking, 1999)、これをヒントにすることができる。ある種に属している対象 (e.g. 行動や習慣)、対象についての観念 (種・概念・信念などのさまざまなものを含む)、クワインの言う「意味論的上昇」によって生じるエレベーター語 (e.g. 「真理」や「事実」。エレベーターが乗客を上フロアに運ぶように、哲学の議論において議論の意味論的レベルをあげる役割をはたす) は、社会構成主義の議論においては別のものとして区別されなくてはならない (ただし、ハッキ

ングは対象や観念という言葉を経験的に厳密な意味では使用していない)。このとき、社会的に構成されているのはもちろん観念であり、対象そのものが構成されるわけではない。対象としての私たちは観念が発明される以前にもそのままの形で存在していたが、観念という特定の記述のもとで自らの行動を変化させる。

相互作用するのは、作り上げられた観念と、その観念の対象である。このように理解すると、一般的に社会構成的であると考えられている種は、対象とされる私たちの行動と観念の作用性が強いために、より相互作用しやすいと理解できる。また、より生物学的な説明が必要とされている種類は、対象と観念の作用性が弱いために、比較的相互作用しづらいと理解できる。

人間の相互作用的な種を支持するレイマン（2020）の種概念は、上記のような考えをよりよく説明できる。レイマンによれば、相互作用的な種はハイブリッドな種であり、カテゴリーを定義する性質によって構築される「基礎的な種（base kind）」と、特定のカテゴリーのメンバーとして認識され扱われることを通じて獲得される社会的地位から構築される「社会的地位の種（social status kind）」からなる。つまり、ある性質によって定義される種概念に分類されると、私たちはその社会的地位に合わせて振る舞いを変えていくのである。たとえば、「女性」という種について考えてみよう。女性という種には、女性を定義する性質によって構築される基礎的な種（e.g. セックス）と、女性として扱われることによる社会的地位の種（e.g. ジェンダー）の両方が存在する。レイマンは、ハッキングが提示したループ効果は基礎的な種と社会的地位の種のあいだで起こると考えている。ある人が基礎的な種によって定義されるカテゴリーに分類されることで、そのカテゴリーに紐づいた社会的地位を獲得し、再び基礎的な種に影響を与えていくのである。

レイマンの考えをより理解するために、ハッキングによる精神疾患の例を検討しておきたい。ハッキングによれば「多くの種類の精神疾患が相互作用する種類であるけれども、しかし同時に無反応な種類でもある」（Hacking, 1999: 邦訳 p. 262）。言い換えると、精神疾患には特定の病因 P があるため無反応な種であると同時に、精神疾患患者と相互作用していく相互作用的な種であるということが、同時に成り立つことがある。レイマンの考えを援用すると、この例は無理なく理解できるように思われる。精神疾患という種において、性質によって構築される基礎的な種は無反応になりやすく、社会的地位の種は相互作用しやすいのである。

ハッキングの相互作用的な種における対象や観念というアイデアや、レイ

マンの基礎的な種と社会的地位の種というアイデアは当然ながら同一のものではないが、種概念のうちにより動的な部分とそうではない部分を腑分けしようとする試みとしては共通項を見出すことができる。一つの種概念の内部において、対象や基本的な種のようなより安定的であると考えられる領域と、社会において揺れ動く領域が存在していると考えられているのだ。重要なのは、セックスとジェンダーのように、これまで異なる種概念として考えられていたものが、一つの種概念として理解されるという点である。

ただし、これらは対象や基本的な種が、観念や社会的地位の種よりも優れた説明を提供すると主張するものではない。むしろ、この異なる領域は違った因果的メカニズムを有しており、異なる現象を説明すると考える方が妥当であるかもしれない。たとえば倉田（2020）は、社会種の実在性を検討する際に、社会現象や社会的事実の説明で触れられる因果的メカニズムは、自然現象を説明する因果的メカニズムとは異なる構成要素を持つことに言及している。本節で主張してきたのは一つの種のなかに異なる説明を要する部分が存在しているということであり、どちらかの優越性を論じたものではない。

## 2.2 相互作用性のメカニズム

ここまでで、一つの種概念の内部においてより相互作用しやすい部分が存在するという考え方について、一定の説得力があることを述べてきた。他方で、種における相互作用性はどのようなメカニズムを持っているのかについては十分な理解が得られていない。ハッキングは「自覚」のみをループ効果の要件にしており、統一的なストーリーは想定できないと述べているが、それぞれのメカニズムについて検討しておくことで新たな存在論的意義が明らかになるだろう。これらは人間の種類と自然種を対立させるのではなく、相互作用性のメカニズムを明らかにすることで種概念を改善しようとする試みである（c.f. Kuorikoski & Pöyhönen, 2012）。

グアラ（2016）は、社会科学の哲学の観点から相互作用性を再帰性（reflectivity）とみなし、相互作用的な種は制度的な種であると主張している。グアラにとって制度とは「人々がそれに従うよう動機付けされているルール」（Guala, 2016: 邦訳 p. 12）である。インセンティブと期待の体系に支えられて、ルールは大規模集団の行動に影響力を持ちうるのである。このインセンティブや期待の体系は、ゲーム理論における均衡として考えられる。種概念は多く提唱されており、例えば恒常的な性質を有するもの（Boyd, 1991）などが挙げられているが、グアラはなかでも種の社会的役割に注目し

たといえる。

グアラは、相互作用的な種のメカニズムを、制度における複数均衡のコーディネーションを用いて説明する。どのような制度も必然的ではなく状況依存的であり、「現在実現している均衡とは別の均衡への調整が存在」(Guala, 2016: 邦訳 p. 196) している。そして、現在の均衡から別の均衡への移動は起こりうるものと考えられる。相互作用的な種における変化はこのような均衡間の移動であり、相互作用性やループ効果は均衡を下支えする再帰性なのである。以下で詳細に検討していこう。

まずは、複数の均衡がある状態から、ある一つの均衡が安定的な制度となるのはなぜなのかということに注目してみたい。グアラによれば、これを説明するための一つの要因が再帰性である。再帰性は「私たちが X を Y として表象し、その結果として、X はタイプ Y の存在物のように振る舞い始める」(Guala, 2016: 邦訳 p. 174) という単純な構造を有している (4)。私たちは複数の均衡が存在する状態から、振る舞いによって制度を安定させていくのである。グアラはハッキングのループ効果や相互作用性を、再帰性議論の延長に位置するものであるとみなしている (5)。人間の種類や相互作用的な種では、人々は分類されたことを自覚することによって、自分の行動を変化させていくという因果的な説明がなされていたことを思い出したい。このような分類概念と人々の信念・行動の相互作用性は、均衡を安定させる役割を果たす再帰性なのである。

さらに、ハッキングによる相互作用的な種の説明では、分類概念や人々が当初想定されていたあり方とは変容していくことが述べられていたことを指摘しておかなくてはならない。グアラはこのような変化のメカニズムを均衡間の移行として記述する。制度の存在によって私たちは安定した行動パターンを獲得し、日常生活を混乱なく過ごすことができている。だが、さまざまなきっかけにより現在の制度、つまり現在の均衡から別の均衡へと移ることが起こりえる。例としてグアラは、同性愛で「カミングアウト」を行わないという均衡  $e_1$  から、「カミングアウト」を行うという均衡  $e_2$  への移行を検討している。

以上のようなメカニズムは、なぜ社会的カテゴリや社会的制度が状況依存的（その均衡は生じうる均衡のうちの一つだから）であるのと同時に、安定的（それは均衡だから）でもあるのかを説明している (Guala, 2016: 邦訳 p. 199)。制度はゲーム理論における複数均衡のコーディネーションゲームの結果として獲得されるため、現在実現している制度が必然的であることを意味しない。それぞれの制度がなぜ現在のよう形であるのかについて歴史的・



社会学的な説明を与えられたとしても、それらの制度が必然的であるとはいえない。つまり、「必然性のないままに、均衡においては、ラベルとそれが記述する行動が極端に安定しているかもしれない」(Guala, 2016:邦訳 p. 198)のである。

グァラのアプローチを用いることで、ハッキングが指摘した、主に科学によって人々が作り上げられる現象をより深く理解することができる。ハッキングが人間の種類の存在論的理論として考えている動的唯名論(6)では、(a) カテゴリーは自然の内に起源をもち、(b) カテゴリーは動的であることが主張される(Hacking, 1986)。(a)は対象実在論などを考慮する必要があるのでここでは触れないでおくが、(b)についてはそのメカニズムが明らかになったといえるだろう。すなわち、私たちが特定の存在物のように振る舞うことによって、安定的な観念が誕生する。「われわれの分類と、そのように分類される人間たちは、手に手を取り合って共に出現するのであり、互いにその誕生を促しあう」(Hacking, 1986: 邦訳 p. 222)のである。

安定的な観念が誕生することにはどのような機能があるのだろうか。最初の均衡点として分類概念が提示されること、すなわち科学が人々を作り上げることによって、制度が構築され、ある程度の不確実性や認知的リソースの増大を防ぐことが期待される。制度の安定性に関するこのような考えについて、ノースは制度が「人間の相互作用性に含まれる不確実性を減少させるために存在する」(North, 1990: 邦訳 p. 33)と述べている。「その結果生ずる制度的枠組みは、人間の相互作用を構造化することによって、行為者の選択集合を制限する」(North, 1990)のである。

しかしながら、科学者らによって提示された均衡は、複数均衡のうちの一つであるかもしれない。複数の均衡が存在している状態において、はじめに安定的な記述を提供するのは科学者などであると思われるが、均衡とそれに伴う記述がどのように変化していくのか(もしくはしないのか)ということは社会的状況に依存しており、統一的な説明が可能であるとは思われない。一度安定した均衡が別の均衡へと移ること、そしてそれがまさに私たち自身の自覚によって起こることが、ハッキングが人間の種類や相互作用的な種の議論を通じて描き出そうとした重要な点であるように思われる。

社会的制度が動的なメカニズムを有していることにより、社会的制度が変わりうるという点は政治的・倫理的にも重要である。社会的制度は固定のものではなく、時代や地域といった文脈に応じて変更されうる。なかでも、特定の種概念へと分類された当事者に不利益が生じている場合には、新しい社

会的制度や均衡点が求められるかもしれない。フェミニスト科学哲学などが明らかにしたように、自然科学の知識ですら社会的状況と無関係ではない (c.f. Harding, 2006)。自然科学の説明のみが人間を説明する方法ではなく、特定の人間の種類にはいつでも改善の余地があり、ループがあることで社会の変化の可能性が開かれるのである。ループには創造的で創発的な力があるかもしれない、新しい種類や新しい現象を生み出すかもしれない。

種概念が社会的な均衡であることを認めることで、いくつかの種概念についての生物学的説明が不可能になるのではないかという反論が予想されるが、このような均衡は種概念のなかで生物学的な説明が果たす役割を否定しない。レイマンが主張するように、基本的な種と社会的地位は別のものである。そのため、基礎的な種を説明するためには生物学的な説明が必要とされる場合があるだろう。ただし、生物学的説明が不当に社会的地位を正当化していないかは、慎重に検討される必要がある。不当な正当化の例として、女性は男性よりも身長が低い傾向にあるため家庭で育児を担当するべき、という主張が考えられるかもしれない。これは、一見生物学的な説明が、社会的地位を正当化しようとしている例と考えられる。ある人間の種類において生物学的説明は可能であるし、それらが一定の社会的地位や制度と結びつくであろうことは説明してきた通りである。だが、生物学的な説明といった基本的な種と社会的地位の結びつきが適切であるかは慎重に議論されるべきであるし、もしも誤りであるならば、ループ効果などの力を借りながら変化していくと考えられる。

## おわりに

以上、イアン・ハッキングの人間の種類を手がかりに、相互作用的な種についての検討を行なった。新しい解釈では、相互作用性によって人間の種類と自然種が区別されるのではなく、一つの種類のなかに相互作用しやすい部分としづらい部分を認める議論へと移行しつつある。また、グァラの提示した相互作用的な種のメカニズムは、相互作用が果たす役割について説明することを可能としている。以上のように相互作用性を理解することによって、人間の種類や相互作用的な種をより深く理解することができる。

最後に、ハッキングの研究の背景には、ミシェル・フーコーへの共感、特に『言葉と物』からの強い影響があることを指摘しておかなくてはならない (Hacking, 1986)。ハッキングは自身を分析哲学の伝統において教育された哲学者に位置付けながらも、フーコーから影響を受けたことを公言しており、哲学の意義は概念の変化を明らかにし、概念の可能性の条件を探ることであ

ると述べている。このフーコーへの共感はハッキングが行う徹底した事例分析と歴史研究という研究手法のなかにも見出され (c.f. Hacking, 1995a; 1998)、人間の種類を理解するための重要なポイントとなる。つまり、このような人間の種類にまつわる研究は、概念の可能性の条件を探り、人間がどのように作られているのかを理解するための試みなのである。

### 注釈

(1) ハッキングは人間の種類において「分類」を重視したが、本稿では相互作用性に注目するため、分類を伴う概念のみを対象としていない。

(2) ただし、既に述べてきたように、ハッキングは自然種という語は適切ではないとして、無反応な種という語を好んで使用するようになっていく。ハッキングが無反応な種と自然種の間をどのように考えていたのかは引き続き検討する必要があるが、少なくともハッキング (1999) は、哲学者が使用する自然種には、無反応性が前提されていることを指摘している。

(3) そもそも、このような離散的な種概念を想定してしまうのは、人間の認識的傾向性によるものだとする心理学的本質主義の指摘や経済行動学からの知見も重要である (c.f. Atran, 1998, Gelman, 2003, Kahneman, 2011)。

(4) グァラのモデルでは、人間の種類の制度的な部分がどのように揺れ動くのかを説明している一方で、それが私たちの経験のあり方などを記述するものではない点に注意が必要である。人間の種類はそのマトリックスから生じる私たちの経験にも重点を置いているのである。

(5) グァラによれば、再帰性は社会学における重要概念であり、「予言の自己成就」を唱えたマートン (1948) のように「再帰性」という言葉が現れる前からすでに出現していた。そして、アンソニー・ギデンズ (c.f. Beck, Giddens, & Lash, 1994) などにおいて重要な概念とみなされた。ハッキングのループ効果や相互作用性は、再帰性の新しい形とみなされる。

(6) 「私の考えでは、多くのカテゴリーは人間の精神ではなく、自然のうちにもその起源を持つ。そしてわれわれのカテゴリーは、静的なものではない。私はある意味で実在論者である。」 (Hacking, 1986: 邦訳 p. 222) と述べられるように、動的唯名論は実在論的傾向を有している。

### 文献表

Atran, S. (1998). Folk biology and the anthropology of science: Cognitive universals and cultural particulars. *Behavioral and Brain Sciences*, 21,

547-609.

Beck, U., Giddens, A., & Lash, S. (1994). *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*. Polity Press. (U・ベック、A・ギデنز、S・ラッシュ『再帰的近代化 近現代における政治、伝統、美的原理』、松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳、而立書房、1997年)

Bogen, J. (1988). Comments on “The Sociology of Knowledge about Child Abuse”. *Noûs*, 22, 65-66.

Boyd, R. (1991). Realism, anti-foundationalism and the enthusiasm for natural kinds. *Philosophical studies*, 61(1), 127-148.

Cooper, R. (2007). *Psychiatry and Philosophy of Science*. McGill-Queen's University Press. (R・クーパー『精神医学の科学哲学』、伊勢田哲治・村井俊哉 監訳、名古屋大学出版、2015年)

Ereshefsky, M. (2004). Bridging the Gap between Human Kinds and Biological Kinds. *Philosophy of Science*, 71, 912-921.

Gelman, S. A. (2003). *The Essential Child: Origins of Essentialism in Everyday Thought*. Oxford University Press.

Guala, F. (2016). *Understanding Institutions*. Princeton University Press. (F・グアラ『制度とは何か 社会科学のための制度論』、瀧澤弘和監訳、慶應義塾大学出版会、2018年)

Hacking, I. (1986). Making up people. In Heller, T., Sosna, M., & Wellbery (Eds.), *Reconstructing Individualism*. (I・ハッキング「人々を作り上げる」、『知の歴史学』、出口康夫・大西琢朗・渡辺一弘訳、岩波書店、2012年)

Hacking, I. (1995a). *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Science of Memory*. Princeton University Press. (I・ハッキング『記憶を書きかえる 多重人格と心のメカニズム』、北沢格訳、早川書房、1998年)

Hacking, I. (1995b). The looping effects of human kinds. In Sperber, D., Premack, D. & Premack, A. (Eds.), *Causal Cognition: An Interdisciplinary Approach* (pp. 351-83). Oxford University Press.

Hacking, I. (1998). *Mad Travelers: Reflections on the Reality of Transient Mental Illnesses*. University of Virginia Press. (I・ハッキング『マッド・トラベラーズ——ある精神疾患の誕生と消滅』、江口重幸 他訳、岩波書店、2017年)

Hacking, I. (1999). *The Social Construction of What?* Harvard University Press. (I・ハッキング『何が社会的に構成されるのか』、出口康夫・久米暁訳、岩波書店、2006年)

- Hacking, I. (2006). Genetics, biosocial groups & the future of identity. *Dædalus*, Fall, 81-9.
- Hacking, I. (2007a). Kinds of People: Moving targets. *Proceedings of British Academy*, 151, 285-318.
- Hacking, I. (2007b). Natural Kinds: Rosy Dawn, Scholastic Twilight. *Royal Institute of Philosophy Supplement*, 61, 203-239.
- Harding, S. (2006). *Science and Social Inequality: Feminist and Postcolonial Issues*. University of Illinois Press. (S・ハーディング『科学と社会的不平等 フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判』、森永康子訳、北大路書房、2009年)
- Kahneman, D. (2011). *Thinking, fast and slow*. Macmillan.
- Kuorikoski, J., & Pöyhönen, S. (2012). Looping Kinds and Social Mechanisms. *Sociological Theory*, 30, 187-205.
- Laimann, J. (2020). Capricious Kinds. *The British Journal for the Philosophy of Science*, 71, 1043-1068.
- Merton, R. K. (1948). The self-fulfilling prophecy. *The antioch review*, 8(2), 193-210.
- North, D. C. (1990). *Institutions, Institutional change and Economic Performance*. Cambridge University Press. (D・C・ノース『制度 制度変化 経済成果』、竹下公視訳、昇洋書房、1994年)
- Rodríguez, M. L. M. (2021). *Texture in the Work of Ian Hacking: Michel Foucault as the Guiding Thread of Hacking's Thinking (Vol. 435)*. Springer Nature.
- 倉田剛 (2020) .「いかにして社会種の実在性は擁護されうるのか—「实在論的」社会構築主義についての試論」, 『哲學』, 71, 49-68.